

校長室だより～和光高校今昔 第23号 H26.10.10

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

進路のしおりの変遷

就職試験、大学・短大の推薦入試、専門学校試験と現在3年生は進路決定の真っ只中にいる。一般入試で大学を受験する生徒は少数なので予備校や塾などに頼る生徒は以前からほとんどいない。ゆえに学校、とりわけ進路指導部が支えている。そもそも「進路」は自身の生き方を方向付けるわけだから高校3年生になってから慌てて対応するものではない。しかしのんびりしている和高生はなかなかスイッチが入らない。その起爆剤となるのが「進路のしおり」なのだ。

20周年記念誌によると「進路のしおり」が最初に作られたのは昭和58年となっているが、これはそれまでの「進路希望実現のために」という久保田敢司、桜井英雄、藤井昌子ら伝説の進路指導主事の先生方により創られたものに、前年度の実績の入る「〇年度大学入試をかえりみて」を付け加え一冊の「しおり」としたものである。2年生に向けて「進路のことも考えよう」も刊行されていた。これらは開校時から受け継がれている素晴らしい内容で、実務面はもちろん大いに生徒たちのやる気を喚起してきたまさにバイブルであった。特に「進路のことも考えよう」の序文は秀逸である。勇気づけられたものは多数いるはずだ。



高校生活の後半に全力を尽くそう

高校時代は将来の基礎を築くためのたいせつな期間である。そして2年生は、社会や学問に眼を向けて、進路をおぼろげながら決めて、目的達成のための具体的準備に入る実り多き学年である。人はいつか職業に就いて生活の糧を得るとともに、社会生活に参加することによって能力を発揮し、さらに能力をみがき、そこに生きる喜びを見出し社会に貢献することになる。どんな職業に就くかは偶然に左右されることもあるが、できれば自分の好みや適性に応じた職に就けば人生の意義はそれだけ大きくなるであろう。そのためには高校の比較的自由な時期にあらゆることを学び経験してみよう。諸君は現在何に向いているか、どんな能力をもっているかは断定できない。すべての教科、クラブ活動、HR活動、生徒会活動等に打ち込むことによって、しだいに自分の好みや適性が明らかになり、自分の進路を見出せるようになるのである。今まで不得意であった教科が永遠に不得意である

わけがない。残された期間の努力によってはどんな能力が芽を出すかはわからないのだ。高校生活も中盤に入った。ここで決意を新たにして、人生の基礎としての高校生活の後半に全力を傾け、自分の進路を見出し具体的準備に一日も早く入ろう。

いつの時代にも通じる極めて普遍性の高い名文である。しかもこの檄を桜井先生が集会で述べると「ビーバップハイスクール」に登場するような生徒たちが一瞬のうちに静まり返る。彼らの真剣に傾聴・注視する姿は感動的であった。写真を撮らせないことでも有名な桜井先生が正に神格化される瞬間である。この中から日本一のパティシエ、世界で活躍する声楽家、大学教授などが育っていく。目先の進路にとどまらない人生指南の現れであろう。余談ながら久保田先生はこの後も研究と実践を重ね、高校教育における進路指導を体系付けるという大きな功績を残し、日本の進路教育のスタンダードを示すことになる。



しばらくは踏襲されてきた「進路のしおり」は、昭和の終わりころ大熊徳明、松井寛らによって刷新される。時代の変化に伴う換骨奪胎の作業であった。卒業生の体験談を掲載したり、抽象的で解り辛い部分を書き直した。大熊は「選択時代にババをひかない」とか「怠け者には明日はない」など分かり易いキャッチを作り、自らの勤勉さで職員集団を牽引した。ほぼ同時期に社会情勢の変化により、求人数が大幅に減少するなど厳しい時代がやってくる。そのような中、平成に入り苦境を打開すべく伝統を受け継いだのが坂本行弘であった。主事2年目となる平成3年度の「しおり」はほぼ全面改訂、ボリュームは約2倍、なにしろ事細かに指針が示されている。坂本の強みは前記の変遷をほぼ把握していたことにある。長い和光での勤務経験が時代にマッチする逸品を作った。冷静な分析と熱い心は困難な時代を支える原動力となった。この後しおりは高井章利がさらに発展・完成させる。平成6年のことである。まさに「微にいり細に渡る」出来栄である。開校以来の伝統がここに結実したとも言えよう。そこから大澤晃らの腐心により現在に至るまでほぼその確立されたスタイルは踏襲されている。何よりも受け継がれた進路に係る精神が今日も若樹たちを育てているのだ。



(文中敬称略をおわびします、また、名前を挙げることはできませんでしたが歴代多くの(すべての)先生方の献身的な努力により和光高校の進路指導が成り立っていることを付記します)